いたウイスキーをメーデーの日に飲んで蒙古歩哨と口論となり、そのあげく蒙古大統領とソ連大使との口論まで発展し、ご迷惑をかけたこと等、思い出は尽きない。

いろいろ思い出は多くあるが、四十五年経過した今、静かに目を閉じて過去を思い出すとき、いろいろのことが昨日のように頭中を駆け回る。今まで交換した度胸の広いロシヤ人お人好しには好感が持て、一人として我々を捕虜として見なかったことはうれしかった。

特に私が感じていた従来のソ連は、鉄のカーテン、秘密の国、恐ろしい国と思っていた。しかしロシヤ人と日常接してみて、それは間違っていたと思う。それはロシヤ人は一番ワイナー（戦争）を恐れ嫌っていたことです。ワイナーはブロホ（悪い）と言っていました。また「真山、日露戦争はロシヤが負け今度は勝ち、今五分五分だから、もう戦争はやめよう」とも申していた。

また給与が悪いとき、その改善を要求すれば、「おれのおじさんは日露戦争のとき、日本の捕虜となり、死んだ馬の肉を食べさせられた。だからお前たちも我慢せよ」と言われたときは二の口が出なかった。

わたしの昭和

鳥取県　村川　豊

モンゴル俘虜（ウランバートルは蒙古の首都、海抜二千百メートルくらいの高原地帯。北緯は北海道の最北より北）

バイカル湖南岸のチタ駅より三、四か所先の名もなき駅付近一面雪野原の中で列車をおろされ、握り飯一個、たくわん二切れを昼食にその後行軍、何キロ歩行したか、踏切の遮断機のような大きいところで休憩。手前に一か所（ソ連側）百メートルくらい先に一か所（蒙古側）厳重な人員点検をしてモンゴルに行軍す。双方に兵隊が五、六十人（国境というところを初めて見て驚いた。）夜通し歩き次の日の夕方に初めての部落に着いた。零下数十度の中、その間食事なし、一泊し朝食後トラックにて輸送、途中大きな倉庫のような建物の中で一夜を明かす。次の日、再びトラックにて輸送、飛ばしに飛ばして

夜半ウランバートル市、郊外の兵舎に着く。（地下室で寝る、地上は屋根だけ、両壁は氷の柱）作業は蒙古大学の建築工事、零下何十度の中ボイラーの場でセメントを練り、背負い子を運び、れんがを持って待っている者、セメントを流せばさっーとこてで平らにし、その上にれんがを置き、その繰り返し繰り返しで積んでいく。雑な仕事に驚く。数か月後に他の収容所に二百人くらいで移動される。君たちは、国家賠償のために働いてもらうのだと言い渡された。

建築・道路・れんが工場・砂場、森木伐採、炭坑から炭送車の炭おこし等々、二、三か月くらいであちらの工場、こちらの工場と移動され、毎日がノルマ、ノルマで重労働、働かざる者食うべからずの共産国、ノルマができなければ欠食、零下二十～三十度のなか体を動かさねば寒く、働けば腹が減る。

食事は、一食朝飯ごうのふたに八分目、スープ（米が花になった状態）中にはホルモン（畜内蔵）小指の先くらいの切れが一、二個、キャベツとバレイショの小切れがはいったもの、昼は黒パン（兵黒、下士官白、黒、将校白）一食分は日本の食パン一斤の四分の一くらいの大きさ、夕は卵大のバレイショ二、四個湯がいたもの（塩分なし）または米・コウリャンをおかゆ以上にたき、スープ状のもの。国際上は一人一回何カロリー、白米、肉、野菜、黒パン、砂糖、雑穀、塩、たばこ、等々何グラムというなれど食事は十分ではなかった。春というか夏というか、雪、あられの降らないのは六、七、八の三か月間、五月の中ごろまで、九月の中ごろから雪、あられが降る。ノルマが終わればこの工場はみんながよき成績でした……がいまだノルマの上がらぬ工場があるので、その方へ応援に行く。次の作業場が終われば帰国させるから頑張って働いてくれ。ここの仕事が終われば帰国する。何度も何度もだまされた。寒い場所に双こぶラクダが多いのに驚く。鍋のふたのような足で早く駆ける。ある日、ヘルニアで作業ができなくなり、アムライト病院で手術を受けた。（麻酔薬なし）術後事務所に呼ばれ、嫌がる人がいるが、凍傷患者の下の世話をしてくれないかと言われ、寒い作業場よりありがたいと約三か月くらい使役についた。凍傷で両膝下から切断二人、右、

左片方切断が三人、足首より、片腕等十人。その折、事務所の板壁に県名別に死亡者の名前が張り出してあり、鳥取県米子市岩倉町石垣義雄、年・月・日が記されてあった。同郷の人だから遺品があればいただきたいと申し出たが、君が無事帰れるかわからんのに遺品は渡されん。最後に病院の勤務者が持ち帰る。(印カン、遺髪、爪、湯呑)それもそのはず飢えと寒さで栄養失調で次々と死亡者が多い。夜寝るまで話をした友が翌朝は冷たくなっている状況、今度は自分の番かと我が身に感じた。

退院後れんが工場に回され初めて地上の兵舎に入った。火、水は厳寒のモンゴルでは一番大切なもの、暖くする燃料の木がなく、牛、馬、ラクダの糞が燃料、水は部落に一か所給水場があるだけ。炊事場の水は河の水が凍れば一里以上先の川へ毛布とバールを持って氷運搬。毎日交代で午前・午後一回ずつ毛布で背負って帰る。飢えと寒さで体力も低下、塩分のない食事で関節ががくがくし、牛、馬の糞に蹴込み、背負った氷で頭を打ち亡くなった友もいた。モンゴルは見渡す限りの禿山、岩山はどこを掘っても水は出ない。

包(パオ)(遊牧民、蒙古人の移動式の家)での燃料も牛、馬、ラクダの糞です。再三帰国々々の話もデマであったが、二年目の九月、町のトラック運転手が帰国開始一陣が出発したとのこと。帰国の話を聞いてから夜ごと火の玉が遠く、アムライト病院の丘方面から飛びかうようになり、歩哨がこわがり発砲しだした。これは本当に帰国できるので、戦友の霊が一緒に帰りたい一念からではないかとみんなの話題となった。

数日後、突然作業中止になり、全員兵舎に帰り装具を持って集合し、昼前に食事を終わらせ早々に人員点呼後にトラックに乗車、帰りは国境もトラックのまま通過、列車のところまで運ばれた。

シベリア鉄道輸送中に左の股関節のところにピンポン玉くらいのかたいくりくりができ、軍医の診察でいま少し待って熟れたら切開をする。化膿を待って一週間後表面が黄色く軟化したので切開、薬がないから我慢しろ口の中にガーゼを押し込み五人がかりで手、足、体を動かんようにして、ヨーチンで消毒して切開、うみを絞り出し後はリバガーゼで終わり、アムライト病院の手術を思

えば楽でした。

三日後ナホトカに到着、港で三日間強制的に共産主義を教育された。乗船をさせぬと言うので従う。日の丸を掲げた輸送船が入港。ここではじめて日本に帰れるんだとみんなで喜んだ。船内で一夜を明かし函館に入港、検疫赤十字病院で二週間、弘前の陸軍病院で十日間、鳥取の病院で二日、その折、陛下のご巡業があり、講堂に患者が集合、外地引き揚げ軍人と立て札の前にお立ちになり「長い間ご苦労さんでした。体の方はいかがですか」とお言葉があり、前の人が「おかげさまでよくなりました」。陛下は「ア、そう、元気で明るくね」とお声をかけてくださった。

翌日皆生病院に帰り、面会に来た長兄に自分は無事帰り、石垣さんは亡くなられたと、私からは言えないから、兄から連絡していただき、石垣さんの面会を受けた。お話の中で体が弱く病院に入院したまでは先に帰国された方より聞きましたが……死亡は初めて……涙で声も出ず遺品もなく、モンゴルの砂ふり場で拾い隠し持ち帰った蒙古の貨幣二、三枚を渡しました。数多くの霊よ安らかに。

モンゴルの交通は電車、バスはなく、馬、ラクダが交通の足、子供たちも馬をよく乗り回す。風土病、熱病（馬の体温計で高熱四十度二分）にてスフバートル病院へ退院後、砂場の作業に回された。収容所の炊事場とは別の小舎から一日中暖かそうに煙が出ている。ある日ソ連兵舎のペーチカが壊れ左官の経験者を使役にと案内され、連絡があるまで小舎で待機、中で作業をしていた人と話をしてたら、君は米子弁だな、米子のどこだァ、道笑町の今井建具店で職人をしていた日野郡二部出身の山本垣（ヒロシ）君、腹が減るだろう、パンを食べと白パン一個二キロ、たばこもありで、夢にまで見た白パンを手にして驚いた。入蒙すると電気、溶接、燻製、大工、かじ屋、木工、運転手等申し出るように言われたが、技術者はみんなが帰っても帰国できないから行くなと班長にとめられた。班に私と二人運転する者がいたが断念した。技能者は特別待遇でした。私もペーチカ作業は二日で終わるのを山本君の入れ知恵で長く長く、五日で終えたその間、肉入りスープと白パンで腹いっぱい、たばこ（パピ

ロス）を十分に、ソ連のたばこは日本と反対で、吸い口が長く、たばこの方が短い。厳寒で皮手袋のためである。れんが工場へ材料取りに歩哨とラクダで（双こぶ）初めてラクダに乗った。名前のとおりラクでした。ラクダは牛、馬と違い、前後肢を折りたたむようにして座り、人が乗れば立つ。その後、歩哨とも顔見知りになり、夕方には山本君の小舎に行き、白パン、たばこを時々仕入れに行き、友と分かち、二か月ほど、十分な腹でした。別の工場に移動したが、ナホトカで面会し、同じ船で帰国。

ソ連抑留体験記

和歌山県　上田宗雄

終戦から入ソ当時の苦労

昭和二十年八月十五日正午終戦の紹勅を、奉天憲兵隊本部前広場でラジオ放送にて知り隊員一同ぼう然とする。あとで聞いたのであるが、本部長鎌田大佐は即刻自決された。

武装解除は二日後ソ連軍により実施され、北陵の通信隊跡に収容される。当時の隊長は中山要三大尉（佐賀県出身）で入ソ後も一緒に苦労をともにした。同年十月末奉天出発、第二十大隊稲葉大尉に所属し日本に帰国とだまされ貨車に乗せられ満州北端の黒河経由で、ブラゴエシチェンスクの部落に渡る。松花江には仮橋が架けられ、みぞれの降る夜間で方角もわからなかったが、とにかく寒さにふるえた。翌日また貨車に乗せられウラジオストック経由で帰国だとだまされ二昼夜くらいたったころ、食事給与ということで当番が受領で出たときに窓ごしに外を見ると駅名がチタとしるされていることを知り、全員西部に連行されていることを知る。

二日後、ノーボイリンスカヤという小さな部落の駅に着き、雪の上に下車約一時間くらいで収容所にはいる。一面の雪野原ではるか西方に五十戸くらいの部落のあることを知る。ここでの作業は山林の伐採、シパルザボード（枕木製材工場）、バランチールカー（まき割り）、貨車へ原木の積み込み等々であった。食事は約三百グラムの黒パンにスープ、燕麦（馬の飼料）、大豆等でいずれも